
白 & 黒

reruka

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白&黒

【Zマーク】

Z2057F

【作者名】

reruka

【あらすじ】

ミルは黒の組織壊滅を目指す白の組織。親友ラオが黒にいったのをきっかけに白に入った。そのミルの未来は?

CALL1・黒&白

雨が降るイタリア。

「雨が奇麗だね。でもさやりすぎでない？」

その質問に笑顔でミルが答える。

「そんな事無いですよ。」

ゆっくりゆっくり影は近づいて来るのだ。。。

同時刻：日本

崩壊気味の日本。ここは、白の組織日本支部がある東京だ。

「明日！？ミル様とカネディ様が来日するのですか！？」

「そうみたい。」

適當そうに言つ。この人はユウ。ミルと親交が深い。

「日本に黒の組織も来るみたいだしちょうどだよ。良かつた」

説明しよう。黒の組織は悪い事する人。

白の組織はその人を捕まえたりする人。

「ミルーまだあ？」

カネディーが聞く。

「さつき飛行機に乗つたばかりです。そんな早い訳ありません。」

するとそこに赤い服を着た老人がやつてきた。

「あなたたち白の組織の方ですか？」

こんな人と言つてはなんだがすぐに教えてはいけない。

「失礼ですが、あなたは？」

老人は咳を一つして笑顔で言つた。

「私はミハエル＝ケーターです。」

みはえる＝けーたー？あれ？聞いた事あるような？あ！

「あなたがケーターですか！今は変装中ですか？」

白の組織の幹部ミハエルケーター！？

（ちなみに僕らは四天王です。四天王はミル、カネディー、ルクス、

ネイです)

老人の格好ですが21歳。なんだかんだで早く見つかった。そういうしてゐる間

(結構たつたよ)に日本に着いた。

「ちよつ・ケーター、ミル先行つといて・・酔つた・うおおおえ・」
そういう相方に対してもミルは

「まったく飛行機で酔つちゃうなんてー」「
と一二二コして言う。

ピリピリ!!

「つ!このふいんきは!クロカ!/?」

チツ!何かがされる音だ。

「ケーターに、ミル。仕留めがいがあるな
・・・!ラオ!」

CAL-1・黒&白（後書き）

後…お楽しみに

C A L L 2・ぶつ殺す

「ラオ？君は黒に行ってどうなったの？」

「ラオ？四天王に入る直前に何があったの？」

「ラオ、なので今あなたを倒します。」

「

ミル？お前は白にいてどうなる？

ミル？あの頃より成長したのか？

「しゃがんでください！ケーター！」

ドガーン！！土？いや壁の爆破音だ。ケーターは？あたりを探すミル。

「ケーター？ケーター！？」

ブツッシャー！血の出る音だ。ケーター！！！

ミルの叫ぶ声が空港のなか、そしてバス乗り場にも聞こえた。カネディーは何をしてるんだ？

そう思った。

「カネディー。君もですか？ラオ！カネディーに何をした！？」

え？ケーターはからうじて生きている中で反応した。カネディーが？何を？

「つつ！テメエ！！」

ケーター！ミルはケーターの再生をホームで見してもらっていたのを思い出した。

ケーター…………そう少し泣きながらケーターを見た。

「では、ケーターはカネディーをやつてください。頭にリングがあります。」

それを取ればカネディーは起きるはずです。そしてラオお前は絶対に許しません。

あなたは…ここで僕が…！殺します。」

「ラオ！」

『装備！スリー アロウズ（三つ又矢）…』

ズーン！ドカーン！！

「六道」

ん？グハツ！チツ！

ギギギギギー！何の音？そう思いケーターが見た。

「よそ見注意」

「カツ！」

ブシャー！

血が！カネディー！お前…！

「テメヒラザけんな裏切つといて仲間にまで手エ出してんじゃねえぞ。

お前らはここでオレがぶつ殺す。カネディーお前はもうリングなんか取らない。ここで殺す。

ラオ。お前は2度とオレに面見せんな。つーか今日ここでオレがお前の腐つた面はがしてやる！

遂に！ミル本氣！

同時刻中国

「じやあ今から私が行つてくるね

ミル！待つてよ 今スグ行くからね

CALL2・ぶつ殺す（後書き）

もつすぐ最終話かもしません
それまでどうぞお付き合いください

CALL3：missile

『プルルルル』こんなときに電話！？やめてよー・そういう顔のミル。

「ルーマンーそこで見るのは分かつてゐるんですけど…少し電話に出てください…！」

「はい。ミル様分かりました。」

一瞬のスキだつた。

「危ない！」

ガン！

「最後に一発行つとくか？」

「来るなら来い！ラオ！」

ドッカ――ン――！――！

「ミ・・・・・・・・・・ミル？」

カネディーはようやく正氣に戻つたようだ。ミルはラオのハンドハンマー大の中にいた。

『オレはどこにいるんだ？中か？』

グツツ！力を入れた。

「h a n d b a l l i s t i c m i s s i l e - - -

そうつづぶやくと中から閃光のようなものが出てきた。

「もう一発行つとくか？」

セツキラオが言つた事をそのまま返すようにして言つた。

「h a n d b a l l i s t i c m i s s i l e - - -」

そう言つとラオの手は崩れていつた。そしてミルは一コツと笑つて

「右手無くなっちゃつたね。」

血は出でていない。元々義手だから。でもまだまだ怒りは収まらない。

「まだ立てるよね。闘らないの？」

余裕？そんな表情で笑う。ラオは石の下に倒れている。ガラツ

石をのけたラオは舌打ちをして

「メンデー様、見てますか？これが・・・グッ！」

ミルは足で顔を踏み笑つて

「もう終わりかー。リリに来てもう必要なかつたね。」

といい去つて行つた。

「リリ久しぶり。」

あらという表情でこつちを見た。

「ミル。久しぶり 前までは私の胸の谷間見て鼻血出してたのに大きな進歩だね」

ブツ！と水をはいて、

「ゴホツ！いやゴホツ！！お前が見してきたんでしょう？」

でもまあ成長したかな？ミルはそうつぶやいた。

「メンデー様！リリが到着した模様です。これでは白が！」

「焦るな。じやあ決戦は1ヶ月後くらいかな？」

リリ。時はやがてくるんだよ。

私がミルの彼女だった時も、まさかあの人人が白の組織だとは思いもしなかつたし。

リリ。あなたはいづれ私を襲いに来るのかな？

「じゃあ明日。トモとアーヤでミルとリリとケネディー狙いに行つて。」

「分かつたよ。ボス」

トモは低く落ち着いた声で言つた。

「アーヤは？」

「もう分かつたつて、メンデー。そんなに焦んなくて。」

決戦の準備。

イタリア本部

「じゃあルクスとネイ。ミルと合流して。オレも後で向かうよ。」

「分かつたボス。旅先は注意してね。」

ネイがニコツとして答えた。

「はいよー。ティキは？つれてかないの？」

ルクスもテキトーそうに答える
「ティキは私が連れて行きます。」

「日本～」

ケネディーの様子がおかしい。

「よくもお前らあラオを！～！」

ニッヒと笑つてリリとミルは田を合わせ

「こいつもメンティーの手先ですか・しんどいですね。」

「手加減はいらないね」

CALL3：missiTe（後書き）

いよいよです第2期も作りたいので；
長いかも

C A L L 4・告白?

「ジエットで早くついたやつたね。」
ネイが勢い良く飛び出してくれる。

「ネイ！」

「こんな奴相手にしてられながら。ボクの攻撃何か知ってる?
ん? 考えた。魔法か。それでなんだ?」

「そう魔法。いまミーちゃんが考てる事も丸分かり。
だから3週間後にタイムスリップ!」

ヒュウウウウウン！

気分が悪かった。闘つてもないのに；

負けたかんがすぐする。カネディーは多分
「d e a t h • m e m b e r」(呪われし5人組)だね。ラオも。
リリ。オレは・どうしたらいいんだろうか? なんだろう。このイラ
イラは?

「リリ・あれは勝てない相手だったかな?」
ちょっと泣きそうだ。

「いや。そんなに勝ちたかったの?」

「はい。白を裏切った奴をほっとく程人間出来てませんから。」
ミル。そこまで考えたの? 心の中で思つた。

私の中で決意が出来た。ミルが好きなんだ。そう思つた。
でもこれは言わない。

「ついたよ・・・? どうしたの?」
はつとした顔でニコッと笑う。

「何でもないですよ。」

ミーちゃん? とした顔。これ以上仲間に心配されたくないミル。

「ネイ。なーに? ミーちゃん?」

「キャラかぶつませんか?」

へ? 生真面目なミルからは予想も出来なかつた。

「冗談です。少し冗談を言つてみたかっただけですの。」「リリ複雑な顔ですね。どうかしました？」

リリは首を横に振った。

「でもネイここで何があんの？」

「・・・・・」

？ネイに無視されるのは初めてだつた。

「ここで1週間！とりあえずトレーニングしておいて。」

「1週間後黒の組織に殴り込みにいく。」

「え！？」

まあ考へてる事は分かつた。ここでhand missileを確実に自分のものにする。

そしてまた過去に戻つてトレーニングで磨く。なんどいだろ？

「さすがミーちゃんするぞ。」

「で？場所は？」

驚きの答えが！

「え？台湾だよ。」

え――――――――――！？

「また飛行機乗るんですか？ネイ・」

リリは深刻だ。告白しようか；

「ねえ？白の組織の人？」

またヤバそうな奴が来たな・ミルはそう思つた。

CALL4・告白？（後書き）

リリだけ変な方向に行っています。

CALL5：大決戦！！

ゾクツ！ん？

「乗客の方はすぐにおりてください。」

「へえ？ なんで？ でも降りなきゃならないから降りた。」

「東京・じゃん」

羽田空港みたいだ。 そうださつきの人は？

「今から、ちょっと廃病院に来て。」

「なんで？ バスで行こうか。 そういう会話をして向かった。」

「失礼するよ。」

誰？ でも新しい人が入るって言ってたな。

「今日から入ったフォスターです。」

あ！？ ガラガラ！！

「！？」

ドッカン！！ つぶれた。一瞬にして。

「どーも黒のトモとアーヤです。」

決戦か？ フォスター？ このために？ 連れてきたのか？

「今日の僕の武器はこの十字架入りの剣なんです。」

と言つてニコッと笑つてみせた。

すると一瞬にしてトモが剣を振り抜いて見せた。グシャツ！！

「！？」

狙つたのは目か？ 違う… 狙つているのは… 腹か？

オレは腕を狙う！！

「フォスター！ アーヤはどうですか！？」

「・・・・！」

何もないのか！？ フォスター！ 無事でいてくれ！！ そう願うしかなかつた。

ヒュツ… う… で… 狙うんだ…

シツ… !

「狙いは腕か？つくづくカスだな。
腕？切れただけか！」

タラー
「――」

出血はひどいみたいだ。でも・・・！？
グツ！？

「目ー？目かつー？」

タラー！！！田から？でも！？

『ヒュイイイイイインー!』

ん？未来が見える？

『やつとか。』

なにが？オレらは？

『ボスに生け捕りって言われたじやん！トモー』

てことは！？

『フォスターもミルもやつちやつた。』

「そんな事信じない！？オレは！？」

CALL6：死VS記憶

『決心できたかい？』

え？あの街の通りすがつたテスラ？

『テレビポートで喋れるんだよ。』

（～2日前～）

「寒いな」

2人でそう言う会話をしていた。

ドンッ！

「！？あ、すいません」と
人とぶつかってしまった。

「いいですよ。」

その人は早足で去つて行つてしまつた。あ、ペン落としていつてる。
気づいた時にはもういなかつた。

（～今～）

『そういえば元に戻つたんだ。』

え？ そうか3週間後に行つてたんだっけ？
でもあれから4週間？ 戻つてる。

『戻したんですか？』

聞いてみた。彼しか考えられない。

『そう。今は集中しな。じゃあ時を動かすね。』

グサツー！一瞬の出来事だつた。すぐだよ。時を動かして！

「クツー！ゴハツー！」

腹？刺された。時が長いよ。手が動かない。
あれが本当になつてしまつのか！？

「フ・・・フオ・・・スタ・！」

気づいて振り向いた。

『ドックン！』

熱い！体が熱い！！

『ドックン！』

もつ何も聞こえないや。剣でも持つてくれ！！

『f u t u r e S c o p e！』

見えてくれ！！

『ドックン！』

フォスター-----

『ドックン！』

「ミル？ミル――！」

泣く声が一帯に広がる。

トモ。なんだこいつは！テメエ――！

「やつちやつたな・アーヤ。アーヤ？」

返事がない。

キュウウウウウウン！

「！？グアア――！」

トモの頭にミルの記憶が流れ込んでいった。あれ？トモは思った。
ここ見た事ある。ぼんやり見える白い壁に小さな部屋。そこで一緒に
になつて笑う友達三人。

「ミル！？おい！なんとか言えよ！」

なんともいえない。死んでいるのだから。フォスター。

「ミル！――」

え？ミルのf u t u r e S c o p eが反対になつて過去を映し出して

トモに見せている。なんとか言えよ。

『あなたは僕たちの仲間です。どうしてですか！？』

そういわれたトモは一人で泣いた。

CALL6・死VS記憶（後書き）

もうすぐ最終話！です多分

C A L L 7 : 『ただいま』

「オレは何をしてるんだろう?」
生き返りなんてこの世にはない。

そう思つてた。でもミルは。どうなるんだろう?
あんなに優しかったミルは?そういう思いが日に日に増していくトモ。

今日1日しか過ごしてないけど優しさが身にしみたフォスター。
でも、そんな時から半年経つた。

ボス戦はなんとか勝つたが、他は惨敗。
死者は両方合わせて1500人以上。

「ミル。久しぶり。」

そこに一人の青年が現れた。

「亡くなり・・・ましたか。」

「失礼ですがあなたは?」

「彼の旧友・・・です。」

f u t u r e S c o p e を使えるようにしたのも彼だし、信用はしてみる。

ミル! そう思つて泣いた。でも青年は笑っていた。ミルに似た、優しい笑顔だった。

ミル? また泣いた。でもなぜ笑顔でいられるんだろう?

「泣いても死人は生き返りません。なのにあなたは何故泣くんですか?」

笑顔で見送らないんですか?」

何言つてるんだ? そう思つた。

「ミラー=フォステル。この方を生き返らしたいか?」

なおさら何を? 生き返らせる?寂しい。こんな力に頼つてまで生き返らしたいのか。

でも、この人を! 信用したい! オレもまた笑いたい!

「そうです。私の名前はステラ。お見知りおきを。」
ヒュウウウン!!

「彼に生きたいという思いがあれば生き返ります。しかしなればあなたが死にます。」

ツツ！テメエ！でも心の奥は決心していた。生き返らす。だから。オレはアイツがいなきやならないんだ！そう思った。

「やつてください！」

ヒュウウウウウン！

「頼む！」

キュウウウン

『おまえたいやき食い過ぎですよ。フォスター』
笑いたい。またみんなと生きたい！

『ミル！おかえり。』

『ただいま』

またこの会話がしたい。生きたいです！

「おかえり！ミル！」

「ただいま。みんな」

この会話、この笑顔、みんなが一生の宝物だよ。

CALLER : 『ただいま』 (後輩や)

つづくんですね :

よく帰ってきた。でもそんなに甘くはなかつた。

「ミル。帰ってきてすぐで悪いんだが future scope で明日を見てくれないか?」

いきなり?首をかしげた。でも久しぶりに頼つてもらえた。嬉しかつた。

「分かりました。」

シユウウウン!

『追撃! A部隊突入! 白崩壊!』

な!?

『ユウ! ユウ!..』

オレか? ユウ!..死ぬな!

『死ね! ブシャツ!』

フォスター!!

『リーパン長! 全部隊黒の組織につく前に全滅!..』

ふう;

「どうだつた? ミル?」

答えたくない。あんな残念な状況。フォスター、ユウが死ぬのを見るために来たんじゃない!

「明日は、ここのが全部隊全滅します。なので、明日は僕に黒を待ち構えさせてください。」

ミル。何言つてんだ。でも、全滅。か。トモ、フォスター、ミル、ネイが四天王の今、この4人で待ち構えてやろうじやねえか。

「なら、オレも行きます。」

フォスター・・・。ありがとう。

「つじやあカスなんかに白を渡せないし。オレも「トモ! ありがとう。」

「オレも行きまーす！」

お調子ものだな。半年経つても。

この四人で迎えようか。その朝を。

みんな心配してくれた。でもそれを裏切りたくない！

「A部隊突入！！」

いけ！！お前らー！因天王とオレの意地見せてやるよ。
バカが！やりあうの？

「クロス・ソード！！」

ヒュウウウウン！！

とうとうミルは本氣モード！

『やつとか？』

『そうですね。』

黒に勝てる！その自信をつけて向かう。

『f u t u r e S c o p e!!』

ヒュウウウン！

あら？見えない？その隙だつた。

「首もーらい」

ガシャツ！受け止めた。ツー。だが、血が出ている。

「もう一発！ある！ミル！」

時すでに遅し。

ブツシヤーー！！

「グツー！グアアアアー！」

重傷か？そんな・・・・！ガラツー！古からミルが立った。

「25秒で倒します。」

CALL9・未来

「生きてたんだ」

futurescopeの特殊能力に人の名前が見れるというのがある。

「黙つてください! リケルメ・サーヴ」

どうして？名前を知ってるのか？そういう顔だつた。

「じゃあ今から25秒で終わらせます。」

ヨーリドン ネイが早々に相手を倒し、お気楽にそういった。

卷之三

二

目がぼやける。グシャツ！髪をつかまれた。

ג' ט' ע

「
よ
ん

ガツ！剣を受け止めた。

時止まれノ

『せつてあざるよ。』

ピタツ。

『あじかど』

話んであります。

۱۰۷

ん?すでに腹のところに剣があつた。

「さよなら。リケルメ・サーヴ」

グシャツ！刺した。6秒でやつてしまつた。

卷之三

— 残り19秒他の3人殺します。

? ? ? 藏の物が圖一覽。

「ゴボッ！」

血が溢れ出してきた

あの時と同じ感じ。死ぬのか?

『ドクン』

第三回 金子の力 一目で死にかかる 仁吉の怒り

「左目再生。そして進化！！」

その声と同時に目を閉じた

「グッシャー」

その晩と同時に3人が倒れた。

キヨノ

「白の組織壊滅状態です。」

一
！？何故だ？

「元？」

『ミル様も左目から大量出血しています。』

なんでもうたに耳かるの

14人か。
..
..
..
..
..。

「グアツ」

stop! futurescope! This is imp

ossible! I do not believe in
he future! Such future I chang
e it!!!」

（やめろ！未来スコープ！）んなのありえない！こんな未来信じない！それならオレが未来をかえてやる…）

ミル・・・

「Try to change it. If you do no
t change it, who changes it?」

（未来を変えてみせり。お前が変えなきや誰が変える？）

ステラ・・・

「It is so. I save a friend.
（そうですね。オレは仲間を救つんだ！）

「It is the spirit! Thus you ar
e good. OK, go! Act violently!
！」

（その意気だ！お前はそれでいい。行つてこい！暴れてこい！
オレは未来を変える。時を変えてやる…！

LAST CALL：死崩壊

未来なんか変えられない。ここまでオレはここにいるんだろう？
冷たい土の中、ここは？

「！？黒のボスじゃネエか！？」

慌てた。トモ・・・。固い！？何が！

「メンデー！？」

グツ！？そう思つて血を吐いた。カツ！？
体が熱い。

「未来を変えるなんて、そう簡単にできないよ。ミル」
そう言われてムカついた。こんな奴そう思つた。

「メンデー。ちょっとムカつきました。」

「コッ」と笑つて左目の下を少し触り

『future scope』

あれ？バグ？
ス――。

「ミル！？その十字架はなんだ！？」
え？そう思つた。そして触つてみた。

「It is only you that it can re
move a curse of the world, and
this cross is a spell of the
world.」

（この世の呪いを解けるのはあなただけです。この十字架はこの世
の呪いです。）

え？呪い？この世の？全世界の？

「うわあつあつあああ！！！！？？」

『オマエラ、ナニヲシテルンダ？』

Hello doll？地獄の人形？この仕業は？ただ黒と白は対立
してるだけ？

「Hello do11!!!!なぜだ!!!!なんで……。」

『You may use the spell. But there is not the guarantee of your life when a cross became blind.』

(あなたは呪いを使つてもいい。ただ十字架が黒くなつた時、あなたの命の保証は無くなります。)

「記憶が……Hello do11に殺された人の記憶が。」

くつ……!

「?」

ぐしゃつ！2度目の腹！？

グッ？

やばい。抜け！！

『ミル。影の首謀者知つてる？実はステラなんだ。メンテー＝スティーラーが本名』

メン・・・・『テー！！！

『さよなら。リケルメ＝ミラー』

「ステラ！」

『Hello do11にたよる？』

そうだ！Hello do11!!!!でも……。

オレは！！

『ドクン』

ははここで終わりか。そう思つたら涙が出てきた。

『ドクン』

さよならみんな……。

『フオ・・・スター……。』

呪いで。オレは呪いで殺されたのか？

「みん・・・なあり・・・が・・・と。」

『ドク・・』

ガタッ

（～2年後～）

呪われた世界が崩壊した。未来を悪い方向に変えたのはオレだつた。

『こんな世界！！ほろぼしてやる！！』

この一言がHello do!!に伝わり今に至る。

長い呪いの力があけ世界は崩壊した・・・。

LAST CALL：死崩壊（後書き）

最終話。こんな形でした。
また特別編作りますので

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2057f/>

白&黒

2010年10月9日03時52分発行